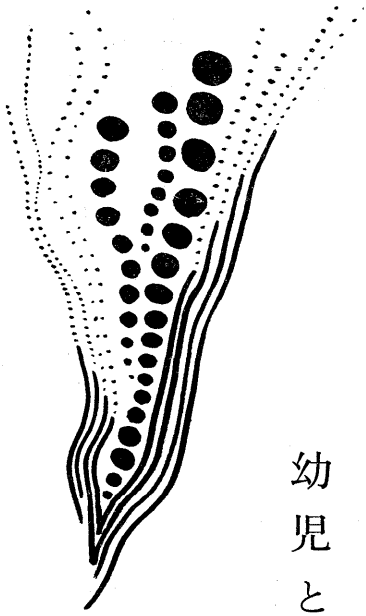
幼児と共に五十年(1)

斉藤芳子



幼稚園との出会い

昭和五年春、大阪から宮城県の漁港塩釜へ主人の赴任に従って移り住んだ。牧師である主人に委ねられた教会は、附属の小さな幼稚園を持っていた。創立大正二年、幼稚園令によって正式に認可された「塩釜聖光幼稚園」がそれである。そして、私は、以後、五十年の余を、この幼稚園と共に歩むことになった。

定員は五十名、保育項目は、「遊嬉、唱歌、談話、観察、手技、等」という時代である。園長は、仙台の尚絅女学院のタマシン・アレン先生が兼任されていた。そのせいか、戸棚には、英字のラベルの貼られたフレーベルの恩物一式が、五十名分備えられていた。恐らく、園長先生が、アメリカから持ち込まれたのだったろう。保育者としては、主任の田中先生と助手の長井先生、田中先生は、東京から赴任されていた。

当時、私は、子育て専門の若い主婦だったが、毎日、自分の子どもを連れて幼稚園に遊びにいき、ピアノに合わせて童謡を口ずさんだりして日を過ごしていた。

ところが、ある時、主任の先生が突然結婚退職されて帰京されるという事態が生じ、後任の主任が定まらずに幼稚園は大混乱に陥入った。当時、東北には保育者を養成する学校がなかったため、保育者の供給が容易ではなかったのである。そこで、時々、臨時の手伝いをしていた私が、急場の代理をつとめることになった。毎日々々保育を見ていたのと、娘時代に習ったピアノが、こんな時、役立とうとは思わなかったのだが、私は保育者になるよう定められていたのかも知れない。

その後、私が正式に資格を取り、主任保母として定着した方がよいということになり、検定試験を受けることにした。母校の奈良女高師附属高女でお世話になった小川正行先生の「教育学」や「発達心理学」など、再勉強の結果、無事に「保母免許状」を取得することが出来た。

幼な子を師として

昭和九年四月、末娘の入園と共に、私は、専任主任保母として、保母の道を歩み始めた。この日から、私の「保育研修」の日々が始まる。「幼児のための真実の愛の保育を」こんな理想を掲げながら、私は、一日も早く幼児について知りたいと、幼な子を師として懸命に努力を重ねたのだが、しかし、様々な障害が立ちふさがっていた。その一つは、「ことばの壁」であった。先ず、そのことをめぐって、若干のことを書き記してみたいと思う。

ことばの壁

話し合って、親しんでもらって、遊びながら心を開いて、幼児理解とはこうした方法によるものと考えていた私は、東北弁を使う幼児たちの前に立ちすくんでしまった。T・Vもラジオもなく、人の交流も余りない当時のことであれば、関西育ちの私には始めて耳にする東北弁だったのだ。

朝の出席一つ、満足にとれない。

「千賀信子さん」返事がない。

「信ちゃん　あなたでしょう」
「ううん、わたす、千ウン賀信ちゃんだもの」彼女の発音をまねてみるが、すぐに訂正されてしまう。
東北弁には鼻音の発音が多いのだが、私には、それがなかなか出来なかった。未だに下手である。幼児の方も、関西なまりの先生の語りかけにポカンとしている。
私　「早く、外に行きましょう」
幼児「？　？　？」
親　「先生が、早くそとさ、あばいんだとっしゃ」
私　「お友達と一緒に遊びましょう」
幼児「だって、しゃねえから、おしょうしんだおん」
親　「名前知らないから、恥しいんでがすっぺ」
返事もしてくれず、すぐ行動にうつらない子どもに対して、初めは、「何と素直でない子だろう。」などと、性格判断をしていたが、しかし、毎日、幼児を師とし、親や地元の人を通訳にして対話を続けるうち、ことばの壁が障害となって、幼児の理解をも誤ることが多いと気付かされた。私が、数回にわたって、園児の言語環境の調査を企てたのは、この壁を取り除きたかったからである。
丁度、手許に、三十年前に試みた調査用紙とその結果が保存されている。また、この同じ項目を用いて、昭和六十年に実施した資料もあるので、その両者を比較しながら、子どもたちの言語環境の変遷について考えてみたい。

言語環境調査項目

・言語指導の参考のため、研究資料を得たいと思いますので、ご記入をお願いします。
・方言も生活語として価値の高いものですから、恥しがらず、ありのまま書いて下さい。

① お子様にあてはまるものに○をつけて下さい。家では――東北弁・標準語・混合
② 入園してから新しくおぼえた単語を書いて下さい。
③ 通常使用している方言を記入して下さい。

④ あなたのお子様に残っている幼児語を記して下さい。

⑤ 五十音中、充分に発音の出来ないものに○をつけて下さい。――サ行・タ行・ハ行・マ行・ヤ行・ラ行・ワ行・濁音・半濁音

⑥ どもることがありますか。

⑦ 言語の指導や文字の指導に対して、何かご意見があればお書き下さい。

（以上）

三十年前は、殆んどの家庭が、ほぼ純粋の東北弁を使用していて、幼児たちも、それをそのまま園生活に持ち込んでいた。現在は、家では生活語として東北弁を用いても、園では共通語である。T・Vやラジオの普及、人的交流が激しくなったことなどが影響して、宮城県の漁港も閉鎖的ではあり得ないのである。

入園してから新しく覚えた単語としては、昔も今も変らず、遊具・教具・教材の名前が挙げられる。ロッカー・ジャングルジム・雲梯・飛び箱・出席カード・さんびか・せいくなど、すべていままでの家庭生活に無かったものばかりで、入園当初の子どもは、知らないものたちに囲まれて、精神的にさぞ不安であろうと思いやられる。

方言の中で、根強く残っているのは、「ございん（いらっしゃい）」「取ってけさい（取って下さい）」「あばいん（行きましょう）」「おしょしい（恥しい）」「こわい（疲れる）」など。

興味深いことに、幼児語や幼児発音は、三十年前より現在の方が、多く残っていた。これは、どう考えたらよいのだろうか。

感謝に耐えないのは、三十年間の親たちの変化である。たとえば、「文字の指導は、子どもが絵本などから文字に興味を持ち、少しずつおぼえ、小学校教育で指導されて正しい知識となっていくものと考えますので、幼稚園の指導は望みません。幼児教育に徹して頂きたいと望みます」という、明快な意見が寄せられたりしてい

る。昔の幼稚園で、親たちから文字や数字の指導を求められて困惑したことを思うと、隔世の感がある。また、「話し言葉は家庭教育の領分と思っていますが、先生や友達に対する言葉使いの誤りや、他人の心を傷つけるような言動はお叱り下さい」という、しっかりした意見に感動させられた。最近の親は、親の責任を放棄しているという批判を耳にするが、そう断定しては一面的であろう。幼稚園は、地域社会の中心として両親にも働きかける機能を持っているのだから、親の意識が低調であるとすれば、それは、園の両親教育の失敗を物語るだろう。両親教育については、別に述べる機会を持ちたいと思うが、この調査では両親の考え方の進歩を、感謝と共に受けとめたことであった。

幼児と共に五十年、昔、園児たちの東北弁に立ちすくんだ私も、いまでは、現代っ子たちよりも、正統な塩釜弁を知っているかも知れない。方言にも丁寧で上品なことばがあること、発音にも品のよい美しい発音があることなど理解出来るようになったので、方言を使うなら、なるべく美しく話すように心掛けている。ことばの問題では長年苦労してきたが、結局は、子どもの発言を受けとめること、教師はなるべく美しく話すこと、本を読んでやったり童話を聞かせるときは、発声や発音に意を配って、ことばに関心を持たせる機会にすることなど結論として言うことが出来るのは、極く当り前のことだけである。

しかし、幼児教育とは、こうした当り前の結論を見出すために、絶えず模索し、努力し、試行錯誤を続けていくものなのかも知れない。

注　斉藤芳子氏は、五十年に及ぶ現場生活を勇退され、現在は、後輩の指導と成人したもと園児たちの世話に当っていられる。本稿は、その長い現場体験の中から、印象深いものを綴って頂いて、編集部で加筆・補足し、雑誌文の形に整えたものである。